幸せをつかむために

白天竺牡丹

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

できる事はなんでもする。

もし、家族が助けてくれたらと考えたｉｆです。

※　志村転弧に、もう一人姉がいる設定です。それでも良いなら、どうぞ読んでいって下さい。

※　２０２３年４月３日

転生の設定を外しました。

目次

プロローグ ―――― 1
第1話　応急処置 ―――― 11
第2話　葬儀と片付け ―――― 22
第3話　引き取り先 ―――― 30
第4話　姉ちゃん ―――― 40
第5話　寄り添う心 ―――― 54

プロローグ

あたしは、志村樹。
6歳。小学1年生。
得意な教科は、国語と音楽と体育。
趣味は、辞書をひく事と、漫画と小説を読む事。あとは、インターネットサーフィン。
あたしの父親は、歪んでいても愛してくれている。
この家には両親と祖父母。妹と犬のモンちゃんがいる。
父さんの名前は弧太郎。母さんが直。爺ちゃんが千津夫。婆ちゃんが真子。妹が華。
幼稚園に通ったけど、落ち着いた性格でなかなか友達ができなくて、その中で自分の名字が志村ということを知った。
妹の華が生まれた後、自分の〝個性〟の浮遊が発現して、両親の表情で良くないことだと察した。でも、診断した医師によれば、他に二つの〝個性〟を宿しているものの、まだ発現していない状態らしい。帰り道で、能力の使い道が思いつかないことで父を安心させたけど、『ヒーローは、人のために役立って凄いね』と言うと、車内の鏡に眉間にシワを寄せた父が映って、こう質問した。

（父さんは、どうしてヒーローが嫌いなの？）

父・弧太朗は、はっきり答えてくれなかった。

弟が４歳になって成長し、彼がヒーローの話をした時に聞き役に回っていた自分も父に怒られ、庭に出され、『ダメだ』の一点張りでまともな説明をしない彼を嫌悪する。

「ヒーローの話をして遊ぶくらい良いと思うけどなァ」

「なんで樹ちゃんも怒られるの？　ぼくの話聞いてただけなのに」

「知らない。なんでダメなのか、ちゃんと言ってくれないから。あと、あたしは転弧の友達じゃなくてお姉ちゃんだから、樹姉ちゃんって呼んで」

「え？　え、っと、い、樹姉ちゃん」

「うん。よくできたね」

「華ちゃんも、おんなじふうに呼んだほうがいい？」

「んー……。そうしようか」

弟と妹をできるだけ褒め続け、遊び相手になったが、ヒーローになることを諦めない弟の盾になることが多くなり、それを減らすためにヒーローものは姉である自分の部屋に全部保管するようになった。

翌年のある日。

小説を読んでいる最中に、父の書斎に入ったことを転弧から聞き、勝手に持ってきた幼い頃の父と、自分から見て父方の祖母が写っている。この後の事を想像できるからこそ、頭の中で嘆いた。

「いつき姉ちゃん。ぼくもヒーローになれるかな?」

「もうなってるよ。仲間外れにされてたみっくんとともちゃんを、自分から誘って遊べる。それだけで、人を助けてる事になってる。だから、転弧なら、あたしよりすごいヒーローになれるよ」

「いつき姉ちゃんもすごいよ。父さんに見つからないように、私と転弧と一緒に遊んでくれるもん」

「ありがとう、華。ひとつ聞いてもいい?」

「ん?」

「なんで入っちゃいけない所に入ったの?」

「て、転弧に、おばあちゃんの写真見せてあげようと思って……」

「また華が父さんに怒られるから、もうしないで」

「うん……」

「わかったら、二人で写真を戻しておいで」

『はーい』

キリのいい所まで読み終わってから、あたしは母に相談しに行く。
「母さん。転弧の痒い原因、ストレスだと思う」
「え？」
「家だと痒いなら、外だと痒くない。この家にあるのは、ヒーローに関係する馬鹿げたルールだけだよ」
「樹！　馬鹿って言っちゃダメ！」
「なんで？　父さんに言われてるから？　言いなりにならないで守ってよ。ヒーローに憧れるのも、話をするのも、遊ぶのも、絵を書くことも、おもちゃを買うのも全部ダメ。あの人にどんな理由があるのか知らないけど、ヒーローに憧れない子どもなんていないんだ…！」
「っ！　ごめんね、樹。我慢させて」
初めて今まで溜めこんだ思いを吐き出し、転弧が生まれて以降、初めて母に抱き締められたけど、『そうされてもなんの解決にもならない』とは言い出せず、諦め、期待した自分が馬鹿だと思った。
数時間後の夕方。
予想通り、華は帰ってきた父に怒られ、書斎に入った理由で嘘をついた妹を叱るより先に、走って弟に手を上げようとする父の背後に近づき、股間を思い切り蹴り上げる。

痛みに苦しんで体をくの字に曲げた隙に、正面に回りこんで初めて買ったジャンプを顔面に叩きつけた。

本来なら、転弧に向かうはずの平手打ちは自分に振りかかり、それでも泣かずに反射的に父のシャツを掴んで左頬を思いっきり殴る。

「やめて、樹！　弧太朗さんも樹を叩かないで!!」

「やめないよ、母さん。書斎に勝手に入って転弧に写真を見せたのは華だし、大事な物が入ってるなら、引き出しに鍵をかけなかった父さんも悪いッ」

今度は、首の骨が折れるんじゃないかと思うくらい全力の平手打ちを食らって、庭に左肩を下にして倒れた。意識はあるものの、あまりの衝撃にすぐには起き上がれず、母は泣き叫ぶような悲鳴をあげながら。転弧は今にも泣きそうな声で、あたしの名前を呼ぶ中、弟が父に叩かれたのを辺りに短く響いた音で知る。

『ごめんなさい』と何度も涙声で謝る母に抱えられ、居間のソファーに寝かせられて横になった後で、華の悲鳴と地面が揺れたのを感じ、ゆっくり上体を起こした。

その横を父が通り過ぎた時に状況を把握し、割れたガラスを踏んで枠だけになった窓から庭に出て、崩壊を免れるために〝個性〟を使って浮かぶ考えは無く、父が枝切り鋏（ぱちばさみ）を振り上げたのが見え、転げこむようにとっさに割って入る。

「て、いッ……！」

「ッ!?」
「ッ！　死ねェ!!」
　右肩に痛みが走った瞬間、反射的に体が硬直し、弟が自分を迂回する形で駆け抜け、思い描いていた最悪の結果が起きてしまった。
　背後で自宅が崩壊する轟音を聞き、土埃が晴れていく中で誰かの咳が聞こえて我に帰り、振り返って駆け寄ろうにもでこぼこになった地面につまずいて、バランスを崩して前のめりに倒れる。
「いッて…。……転弧。…転弧、聞こえる?」
「……あ、いッ、いつ、いつき姉ちゃ、ぼくッ」
「あたしは大丈夫。……暗いな」
　ズボンのポケットに入れていたスマホの存在を思い出して、起床時から録音しっぱなしだったボイスレコーダーを停止させて保存し、ライトを灯して液晶画面を下にして太ももの上に置く。
「自分の手を握ってて。こんなふうに」
「う、うん…」
「おいで。転弧」
「ッ……！　いつき姉ちゃん!」

自分の真似をして手を握ったのを確認し、優しく抱き締めてから、次に呼吸を真似するように言ったものの、片手で背中をさすっても、なかなか呼吸が安定しない。とにかく、父を思い出させる叩く行為をやめてさすり続け、時間をかけて深呼吸を繰り返していると、徐々に荒かった呼吸が普通になってきた。

静かになって、どれだけ時間が過ぎただろう。

改めて弟に会話を試みる。

「…〝個性〟を使うのが初めてで、コントロールできなかったんだよね」

「こせい……？　これ、ぼくの〝個性〟？」

「うん。物を崩して…。…ボロボロにして壊す〝個性〟」

「……ぼくの」

「そうだよ」

それから惨状を思い出したのか、『ごめんなさい』と繰り返し告げる青白くなった弟の髪を撫でながら、スマホのライトを頼りに服の裾で吐瀉物で汚れた口を拭き、灯りを消して膝の上に座らせる。でも、恐怖から転弧から触れて来ない。

「どうしよう…！　ぼく、ぼくどうしたらいいの!?　たすッ、助けていつき姉ちゃん！」

「大丈夫。あたしは転弧のヒーローだから、何があっても助けるさ」

「ほんと…？」

「本当だよ。華みたいに嘘はつかない」
「……」
「……ちょっとだけ、電話してもいい？」
「…？　うん…」
　手探りで自分の電子端末を探して警察に通報し、事故だと言った上で問われた事に答えていく。最後に、弟と一緒に庭にいると言ってから通話を切って、二人でぼーっとしていると、遠くからパトカーのサイレンの音がして、家の前で停車した。
「ど、どうしたの…？」
「あたし達を助けるために来たんだよ」
　ドアが閉まり、警察官が懐中電灯で辺りを照らし、庭に座りこむ子供達を見つけて、この惨状に絶句する。だが、懐中電灯で照らされて反射的に目をつぶってしまった自分達に、毛布を抱えて謝りながら片膝をついた。
「こんばんは」
「あッ…」
「…こんばんは」
「お名前言える？」
「志村樹。弟は、転弧です」

「佐々木です。樹ちゃんの足の裏、怪我してるね。先に病院行こうか」
「はい」
パトカーの中で、警察官から『大丈夫だよ。もうすぐ病院につくからね』などと慰めの言葉を頂いているうちに、たまに世話になる総合病院に到着した。
当然、時間外で夜勤の先生に応急処置をしてもらった後、看護師に発現したばかりの転弧の〝個性〟を告げ、血濡れた状態を見かねてお湯で濡れたタオルで指を一本一本拭き、最後に手首まで血拭き取り、試しに親指をガーゼで覆ってからテープでとめてくれる。そして、一階のベッドがたくさん並ぶ部屋に車椅子で案内された。
「もう大丈夫だから。今日はおやすみしようか」
「はい…」
警察官は一旦帰り、代わりに弟にガーゼを被せてくれた看護師が部屋に入ってきて、今夜はここで寝ることになると教えてくれた。
「あの…、お水もらえますか?」
「うん。持ってくるね」
「自分で取りに行きます」
「気持ちは分かるよ。でも、樹ちゃんは足の裏と右肩を怪我したばかりだから治りにくくなるの。……だから、私に任せてくれないかな?」

「……はい。…お願いします」

歯切れの悪い言葉にも、彼女は笑顔を浮かべて部屋を一時的に退室する。そして、紙コップを二つ持ってきた方にお礼を言って受け取り、あたし達の間にあるカーテンを開けたままにして、外側だけを閉めてくれた。

喉を潤してからやっと一息ついたものの、まだ気が張っている。

「…転弧。大丈夫。姉ちゃんがいるよ」

「うん…」

予想通りの事が起こったため、おそらく精神的なショックから記憶喪失になっていて、罪悪感だけが残っているだろう。

今は、それでいい。

自分が代わりに覚えているから。

ベッドから降りて改めて転弧の青白い髪を撫でながら、眠るまで胸を軽くゆっくりと一定の速度で叩き、空いた手で弟の手を握り続ける。先ほどの紙コップが壊れなかった事で、五本指で触れない限り〝個性〟が発現しないと解っただけでも安堵できた。

穏やかな寝息が聞こえた頃にそっと手を離して、明日のことなどどうでも良くなり、自分のベッドに戻らずに目を閉じた。

第1話　応急処置

家族5人と一匹が死んだ翌朝。

病院で転弧と朝の挨拶を交わし、応急処置をしてくれた先生の声がカーテン越しに聞こえて、診察室で説明を受けていく。内容は、明後日改めて病院に来て、形成外科の先生が局所麻酔を使って縫うだけの手術をすると言う。

「…お金、持ってないです」

「夜だったから、計算してくれる人がいなかったんだ。別の日でいいよ。その時になったら、樹さんのスマホに電話しますね」

「はい。…ありがとうございます」

「それから、昨夜の話を聞く限り、精神的ショックが大きいので精神科を受診して下さい」

「わかりました」

腹が鳴り、渇いた喉を潤して空腹を紛らわせるために水を一杯ずつ飲んでから、昨夜は夕食前に〝個性〟事故が起こり、まだ朝食も食べていないことを思い出す。それは弟も同様で、売店で何か買おうにも所持金が無いことで途方に暮れた。

「…お腹すいた」
「そうだね。家に帰ったら、何か食べに行こうか」
「うん…」
　いくらか落ち着いた転弧の髪を撫でながら、学校や幼稚園を休む理由は忌引きで、インターネットでそれぞれの電話番号を調べてから、担任に家族を代表して報告する。会計が行われる場所の前でテレビのニュースを眺めていると、誰かが自分達に話しかけてきた。知らない人を前に二人で戸惑う中、警察手帳を見せて私服警官だと言って、昨日の状況を詳しく聞くために来たらしい。それに同意してパトカーに乗って向かった先は、警察署ではなく、崩壊して瓦礫と化した自宅だった。
　まだ血溜まりが残る庭を目撃し、亀裂が走ったままの玄関アプローチの上で膝をついて吐いてしまった弟の背を擦りながら、自分から見た状況説明と家族構成。家庭環境を全て話す。次に彼らは、転弧から状況説明を受けようとしたが、そう上手くはいかない。
　今の弟にとってそうする事は、家族を自分の手で。発現したばかりの〝個性〟で殺したという事実を突きつけるだけだが、やらなければならない。
「転弧。無理はしないで。嫌なら嫌って言っていいんだよ」
「……。いつき姉ちゃんは、覚えてる？」
「うん…。父さんだけは」

しゃがんで目線を合わせ、親指をガーゼで覆われた小さな両手を優しく握り、しばらく彼に考えさせる時間を作る。

やがて、弟が口を開いて言った。

「……ぼく、あんまり覚えてないけど、姉ちゃんと一緒なら、大丈夫かもしれない」

「…そっか。じゃあ、転弧の準備ができたら、一緒に行こう」

「うん」

そこで片手を離して、向き合っていた状態から反転して隣で立ち上がり、これまでしてきたように転弧自身の意志をできるだけ尊重する。彼に合わせて一歩前に踏み出したが、どうするか解らないのか二歩目で立ち止まった。弟の中で混乱しているであろう記憶と感情を整理するため、推測を口にした。

「父さんに叩かれた後、庭にいた？」

「うん…」

「いつも座ってた隅っこだね」

それから頭痛と吐き気に苛（さいな）まれる転弧のペースに合わせて、家族の名前を一人一人言いつつ、時間をかけて順を追う。

「モンちゃんと一緒にいてね、最初にバラバラになったの。……嘘をついて謝りに来た華ちゃんに、声が出なくて助けてって言って、服を掴んだらバラバラになった。それを

見て吐ちゃって、顔を上げたら遠くにお母さんとおじいちゃんとおばあちゃんがいて、地面を触ったらバラバラになって、お母さんが駆け寄ってくれたの。……でも、抱き締める前にバラバラになった。たぶん、おじいちゃんとおばあちゃんは遠くにいたままだったと思う。……でね。お父さんが来た時に謝ろうとしたけど、また地面が崩れて、何か棒を持つのが見えた。いつき姉ちゃんが間に割りこんだら痛そうな声をあげて、またお父さんがいつき姉ちゃんを傷つけたってわかったから、今度は僕がいつき姉ちゃんを守るために、お父さんに触れて殺しちゃったんだよ」

　黙って弟の話を最後まで聞き、近づいて話しかけてきたのは病院に来た私服警官で、あたしと転弧に目線を合わせるためにしゃがみ、これまでの内容を書いた紙に署名をする。

「樹ちゃん。転弧君。辛いのに、話してくれてありがとう。それと、ご家族の遺体を引き取るまでにまだ時間がかかるので、先に葬儀社を決めて下さい」

「…葬儀社？」

「お葬式をしてくれる会社のことです」

「ああ…。わかりました。……モンちゃんもですか？」

「そうですね」

　彼によると、これから警察署に行って一時保護になるらしい。到着早々葬儀社の資料

を渡されて、家族は警察署から一番近い葬儀社を。ペットの記載は無く、再度ネットで調べて双方に連絡を取り、一息つく。そして、一時保護を受け付ける係の人が来て、新しい服と靴。食事を与えて下さり、ひとまず空腹を満たせた。

数十分後。連絡した葬儀社の方が警察署に来て、自分がウェブ上で選んだ一番安いプランを伝えた上、地方新聞に訃報を載せるようお願いし、見積りをお願いする。総額は、自分の貯金と香典を当てにしてなんとか払えるだろうと希望を持ち、詳細を話してから一旦別れた。

「誰か近所の人が来てくれないかな」

「なんで?」

「ここにいられるのは、長くて一日だって係の人が言ってたの。それ以上は、誰かが迎えに来ないといけない」

「誰か…?」

「転弧のためにも、知ってる人がいいでしょう?」

「うん」

15時を回った頃に、正式な引き取り先が決まるまで、自宅の向かい側に住む家族に預けられることになった。自分の吐いた言葉が現実になった事態に驚き、自分を呼ぶ弟の声と裾を引っ張られる感覚に遮られる形で、強制的に現実に引き戻される。

　そして、いつか来る惨事のために近所付き合いをしてきた成果が表れたのだと、独り安堵した。
「…何？　転弧」
「車乗ろう」
「ああ…、そうだね。…ありがとうございます。光代さん。これからお世話になります」
「そんなに固くならないでいいよ、樹ちゃん。転弧君も何か欲しい物があったら、なんでも言ってね」
「うん」
「家の片付けがしたいです」
「でも、規制線が…。黄色いテープが張られたままだけど」
「警察の人が外した後で構いません。中に貴重品があるので、早めに片付けておきたいんです」
「…わかったわ。それまでに、近所の人達に声かけてみるから」
「ありがとうございます」
　家に着いてから手洗いとうがいを済ませ、アイスのピノを頂きつつ、自分と転弧の外科や精神科の治療や父達の葬儀。親戚や知人に引き取られた場合の引っ越しに伴う転校など、これからのことを話してから、心配顔で昨夜のことを尋ねられた。ここで言葉

を濁せば面倒になると思い、簡潔に述べる。
「転弧の〝個性〟が現れた結果です」
「まア。突然?」
「はい」
「そう…」
自宅が崩壊し、玄関アプローチや隣家の庭。歩道まで亀裂が及ぶほどの強力な〝個性〟の跡を見れば、そんな反応になるだろう。弟が居心地の悪さを感じさせないように会話を切り上げ、話題を変えた。
「セロテープかマスキングテープを頂けませんか?」
「いいけど、どうして?」
「転弧の〝個性〟を制御できるものがあれば、生活できると思って」
「ああ、なるほど。…ちょっと待っててね」
「はい」
黙ったまま席に座って、冷たい麦茶が入ったコップを手に取らない弟に貼る前に、まず自分で試す。
セロテープは粘着力が強く、剥がす時に痛みが伴う。切る時の台もいるし、重くて持ち運びには不向きだ。マスキングテープは簡単に破れるが、粘着力が弱くて心許(もと)ない。

他に何かないか居間を見渡していく中で、救急箱が視界に入った。ガーゼとテープだとかさばり、覆うまでに時間がかかる。他に手軽で、数があるものは……。
「……あ。絆創膏。絆創膏、ふたつ下さい」
「え。あ、わかった」
絆創膏を頂き、フィルムを剥がして人差し指に貼ってから、水に濡れたままで親指を覆っているガーゼを剥がし、さっき洗面所で使ったタオルで指先の水分を拭き取っていった。それから居間に戻って、コップを持つよう提案する。
「大丈夫。病院の紙コップ、壊れなかったでしょう？」
「…うん。……！」
おそるおそる利き手でコップに五本指で触れた後、ガラスが壊れなかったことが信じられないと言いたげに、黒から赤に変色した瞳が、昨日の昼以来初めて輝き、喜色満面な表情で転弧が自分を見上げた。沈んだ表情から一転し、驚いてしばらく呆気に取られているのを気に止めず、両手でコップを持ち、ゴクゴクと音を立てて麦茶を勢い良く飲んでいく様子を眺めていると、また裾を引っ張られる感覚がする。
「…いつき姉ちゃん。大丈夫？」
「うん。大丈夫。ボーッとしてただけ」
「樹ちゃん。転弧君。客間空いてるから、好きに使ってね」

「ありがとうございます」
「ありがとうございます」
改めて、帰宅した飯豊家の子供や大黒柱に対して挨拶し、治療費を後日遺産から支払うことを条件に立て替えて頂いた。

翌朝の水曜日。
あたし達のために高校を休んだ長男の喜明さんに言われて、昨夜受診した総合病院の形成外科を受診し、局所麻酔で縫合手術を受け、2週間後に抜糸すると医師に言われた。弟のついでに精神科に受診した結果、弟は心的外傷後ストレス障害――ＰＴＳＤと、それに伴う記憶障害だと診断され、あたしも今は安定しているように見えてるが、『念のために』と気分安定剤を各自1ヵ月分下さった。さらに、売店で昼食を挟み、〝個性〟把握検査を受けて、弟の〝個性〟が発現している事を確認し、唯一の肉親になった自分の話から、発動型の『崩壊』と名付けられる。
1日で3つの科を梯子して、会計の待ち時間に警察署から電話があり、午後から聞き取り捜査のために出向けるか問われ、それに承諾する。帰路につく途中で、葬儀に向けて大型店舗の服屋でなるべく黒い服や靴を選び、レシートを借りてノートに出費の内訳を書き出し、いつか現金としてお小遣いの中から返そうと計画を立てる最中、自宅前の

規制テープが解除された。
　貸して下さった軍手をつけてすぐさま中に入り、瓦礫の中から、自分の机の引き出しの一つを解錠して、貴重品と充電器。転弧が大事にしているヒーロー関連の物が入ったスーツケースを、クローゼットから力任せに先に出す。引き返して、５人分の身分証明書や、母が管理していた自分達の診察券と健康保険証が入ったカードケース。皮膚科でもらった転弧の薬をなんとか見つけ出し、玄関アプローチの中間地点で待機している転弧の方向を見ると、口を開けて呆けている。そういえば、スーツケースを運び出した時も同じ表情をしていたが、頭の中がやるべき事で一杯で気づかなかった。
「…転弧。さっきからどうした？」
「…い、いつき姉ちゃんの〝個性〟って、他の物も浮かべられるの？」
「？　ううん。自分だけだけど」
「じゃあ、別の〝個性〟？」
「え？」
　弟の言葉に疑問を懐き、彼が遠慮がちに指差す先には頭上に瓦礫が文字通り浮かんでいた。
　真っ先に頭に浮かんだ言葉は、念動力だった。
「いつき姉ちゃん!!」

「っ!?」

強く腕を引っ張られた直後、ほぼ転ぶように駆け、背後で瓦礫が落ちる轟音が響いた。怪我は無いか心配して問いかける弟に対し、ただ『大丈夫だ』と答えながら、今は自分の事は頭の隅にやる。

「……助けてくれてありがとう。転弧は、あたしのヒーローだ」

「ヒーロー…?」

「うん。今、あたしの命を救ってくれた、立派なヒーローだよ」

はにかむ弟を見て、守りたい笑顔が目の前にあって、彼がなりたかったのはヒーローだったと思い出し、張っていた糸が切れたように気が抜け、ぼろぼろと涙が溢れて泣いてしまった。

第２話　葬儀と片付け

自宅の規制テープが解錠された翌朝。

警察署から連絡が来て、遺体を引き取りに来るよう言われ、昨日買ったばかりの喪服を着た後に必要な物を持参して、転弧を家に置いて光代さんの運転で向かった。そこで弟の〝個性〟事故として処理され、書類に署名したり頂いたりして、葬儀社の方にお願いし、弟と合流するために火葬場に直行する。そこには、両親の親戚や友人知人。さらに彼らの恩師達もいた。華だけでなく、自分と転弧の友人家族と担任の先生も来て下さっている。案の定、転弧の友達のみっくんとともちゃんは、幼さからくる無邪気さゆえに髪や瞳の色が変わった理由を問い、口ごもる弟を守るために輪から一緒に外れた。

「いつき姉ちゃん…。吐きたい」

「わかった。トイレ行こう。まだ我慢できる？」

「ん…」

昨日発現したばかりの念動力で転弧を浮かせたら、浮遊感でさらに吐き気が悪化しそうなので、洗面所の縁まで到達するために自分の膝が汚れ、否応なしにのしかかる弟の体重も構わずに肩車をする。全て吐き出すのを待ち、口元を綺麗にしてから下からハン

カチを手渡した。
「…ありがとう」
「どういたしまして。それ持っててていいよ」
「うん」
男子トイレから手を繋いで出てから、また吐くと思うと、会場に戻るのが得策ではないように思えて、一時的に外の空気を吸うことを提案する。転弧は訳が解らないながらも聞き入れ、階段に隣同士で座った。
不安な顔で見上げられて、弟を安心させるために微笑みを浮かべる。
「転弧に、いい事教えてやろうか」
「いいこと？」
「うん。ここに来る前に、警察の人達が〝個性〟事故で片付けてくれたよ」
「〝個性〟事故？」
「母さん達がああなったのは、わざとじゃない。転弧の〝個性〟がうまくコントロールできなかったから起きたことで、たまにそういう子がいるんだって」
「……そっか」
「…あれから、他に思い出したことある？」
「…うん。あの時、お母さんが、僕を抱き締めようとしてくれた。でもね、その前にバラ

バラなったんだ。それとね、お父さんは、殺したくて殺した。全然かゆくないんだよ」
　ストレスの原因が父だったとしても、嬉々として告げる様子に異常性を見たけど、ここできちんと感情を整理して言葉に出さなければ、性格が歪んだまま育ってしまう。
「転弧は、父さん達が嫌いだったんだね」
「嫌い…？」
「殺したいほど憎いって言葉があって、解りやすく言うと、殺したいくらい嫌いって意味なんだ」
「殺したいくらい、嫌い…。……」
　考える時間を与え、幼いなりに解釈していき、やがて腑に落ちたらしく、ぽつりとつぶやいた。
「僕、みんな嫌いだ…。あ…！　モンちゃんと、いつき姉ちゃんは大好きだよ！」
「ありがとう、転弧。なんでみんな嫌いか、教えてくれる？」
　あわてて訂正する姿がかわいくて思わず笑ってしまいたいところだが、感情が昂って〝個性〟が覚醒し、今座っている階段を伝って自分が壊れやしないか、内心ハラハラしている。しかし、そこから堰を切ったように今まで我慢していた不平不満を、唯一の肉親になった自分にぶつけてしゃべり始め、同時に首や目の周りを小さな手でガリガリと掻きむしった。

「は、華ちゃんは、お父さんの部屋にあったおばあちゃんの写真を見せたのに、それを僕のせいにしたの。おばあちゃんとおじいちゃんは、僕といつき姉ちゃんが庭に出されても、いつもたすけてくれなくてね。お母さんはお父さんに『らんぼうはやめて』って言うのに、お父さんの味方して、お父さんは、ヒーローごっことかおもちゃも全部ダメだって言って、嫌だった。あの日、華ちゃんが見せてくれた写真でね。おばあちゃんがヒーローだって知って嬉しかったけど、いつき姉ちゃんと僕を叩いたでしょ？　だから…、だから、みんな嫌いだ」

「そっか。…あたしも、転弧と同じ理由で、父さん達のこと大嫌いなんだ」

「そうなの!?」

「うん。だから、あたしは父さん達が死んでも全然悲しくないし、いなくなって心が軽くなったよ。でもね。嫌いだからってなんでもかんでも壊したら、『志村転弧君は敵(ヴィラン)だ』って誰かに言われて、いつかお巡りさんに捕まっちゃうかもしれない」

「え？　……わ、わかった。僕も、悲しくない。けど、捕まるのはやだ」

「よし。じゃあ、一緒に、感情と〝個性〟のコントロールを勉強して、ヒーローになろう」

「うん！」

「…もう大丈夫？」

「うん。ありがとう、姉ちゃん」

「どういたしまして。でも、戻る前に薬塗ろうか」
「？　かゆくないよ？」
「父さん達のこと話してる時、ずっと掻いてたよ」
「…そう？」
　ガリ、とまた首を掻いたため、話題を『写真のおばあちゃん』に変えて気を逸らし、手が離れた隙に愛用しているライフガードのリュックから、転弧が使っている痒みを抑える塗り薬を取り出す。興奮して語る弟の話に相槌を打ちながら蓋を回転させて外し、適量を指先に取って首や目の周りに塗りこんでいった。
　上機嫌になった弟と手を繋いで会場に戻り、遺族として責任を持って、参列して下さった方々から順番に香典を受け取る。遺体が完全な骨になるまでまだ最低でも1時間弱あり、頭の中で総額をざっと計算しても、転弧の将来のために残せる分は無い。全て葬儀費用に消えていくのが判り、胸中で嘆息した。その折、スタッフの方が見えて、お骨をどうするか。墓は立てるのか尋ねてきた。弟の精神的ストレスになりうるものはできる限り無くすために、骨壺も手元に置かないほうがいいと考え、こう答える。
「墓は立てません。骨は…、海にまけますか？」
「散骨ですね。できますよ。専門の業者の方がいますので、ご自宅に帰られてからインターネットで探されてみて下さい」

「解りました。ありがとうございます」

スタッフと別れて弟の姿を探していると、友達と手遊びやおしゃべりを楽しんでいた。かたや、自分の数少ない友達といえば、遠巻きに会釈するのみで多くは語らずに、ただ返礼する。

葬儀の翌日。

会社を休んだ光代さんと総合病院と区役所へ行く。

午前中に〝個性〟把握検査を受けた病院はともかく、区役所が平日しか開いてない事は知っているが、ここは敢えて小学生らしく、初めて知ったという反応を示した。

警察から死亡届と検案書をもらったので、それに基づいて1週間以内に行わなければならない手続きを、窓口で手渡された一覧表を見ながらある程度片付けた。帰り際に弟の〝個性〟届の用紙を頂き、控えの診断書を基に〝個性〟名に『崩壊』と書いて提出して、新たに発現した自分の〝個性〟『念動力』を追記し、無事担当の方から受理される。

昼食後に再度自宅だった瓦礫を念動力の〝個性〟で浮かせ、祖父母と両親の通帳を探し出して、必要な書類を持参し、これまた光代さんの運転で複数の銀行と郵便局に行く。解約の手続きと残高を払い戻してもらい、10日から2週間後に総額を一括で受け取る話をして、大金のため三菱ＵＦＪ銀行で口座開設をしようとしたが、本人確認書類や印

鑑を持っていなかったため、１４歳以下の開設の説明を受けて銀行を出た。
疲れきったあたし達を気遣って、帰路にあるセブンイレブンに寄り、好きなアイスをそれぞれ購入するついでに、絆創膏を探した。でも、たった１０枚入りで諦め、外で完食してから飯豊家へ帰宅する。

〝個性〟事故から8日が経過した日。
平日だが、ご近所の方々の協力を得て、瓦礫の撤去作業を始めていく。瓦礫と壊れてしまった家具家電類は、数台の軽トラックの荷台に積み込んで、無事な物は亀裂が入ってない場所へまとめて集め、自分と弟の所持品と故人の遺品を大まかに分けていく。昼食とお菓子の休憩を挟みつつ、夕方になる頃には跡地になっていた。深々と頭を下げて再度お礼を告げ、長い1日が終わる。
しかし、疲れから食欲が湧かず、頭に浮かぶタスク処理とノートに書かれた項目の一覧を改めて見て、夕食の手伝いをする気力が起きない。
「明日は服と本を売って、それから司法書士と税理士を紹介してもらって…。あ。散骨業者も探さなきゃ…」
「樹ちゃん。散骨業者見つかったよ」
「ありがとうございます…」

飯豊さんご家族が頼んだ出前であっても、転弧は初めてのファストフードに目を輝かせ、あたしは数ヵ月ぶりに食べる照り焼きハンバーガーを前に幸せを感じ、オレンジジュースで喉を潤した。

第３話　引き取り先

父達の葬儀と同日にモンちゃんの火葬も済ませ、司法書士と税理士にこれから支払う総額と、２ヵ月後に合同散骨を執り行う業者の代金を差し引いても、まだ遺産に余裕がある。だが、これで専門的な事を抜きにして手続きが一段落し、事故が起きた今月中に片付いて、ようやく心に余裕ができた。

「…転弧。幼稚園行きたい？」

「っ！　うん！」

「いつにする？」

「いつでもいいよ」

「うーん……。……月曜日にしようか？」

「うん」

「よし。園長先生に電話してくる」

税理士が帰った後で転弧と二人で遅めのおやつを食べている最中に尋ねたところ、前向きな返答をもらって、食べかけも構わずに弟が通う幼稚園に。その次に自分が通学する小学校に連絡し、来週の月曜日に行く事を伝える。

明日は葬儀から一週間が経つ日で、そろそろ引き取り先が話題に上ってくる頃だろうと考え、夕食後に『母方の親戚に』と飯豊さんに希望した。なぜ父方では駄目なのかと当然訊かれ、正直に答える。

「父方の親戚だと、極悪敵ヴィランに目をつけられてる可能性が高いからです」

「お父さんから聞いたの？」

「いえ。父方の祖母が父宛てに手紙と写真が遺されてたので、それで知りました。それに、今の転弧を独りにすれば精神的に不安定になるんで、二人一緒じゃなきゃ行きませんって伝えて頂けますか？」

「わかった。伝えておくよ」

彼はそれ以上何も言わず、自分達の代わりに親戚に連絡を取って下さった。聞こえてきた会話の内容から、司法書士と税理士に依頼した相続継承業務が終わるまでは飯豊家で預かってくれるらしく、大叔母の嫁ぎ先の谷藤家もそれで合意する。そうなると、引っ越しは2ヵ月先になり、どんなに遅くても夏休み明けになりそうだ。

翌日に光代さんの都合がつき次第、故人の大量の本と服を売る予定で、自宅で見つけた絆創膏の残りが３０枚ほどしかなく心許ない。そこで、古着屋から近いスーパーで弟と自分用に二つ購入し、帰宅してから売った総額を数え、転弧と二人で分けた。

登校した週の水曜日に、足裏と肩口の抜糸をして下さる。さらに、1週間後。口座開

設した銀行から連絡を受けて大金を受け取り、翌日に半額を同様に入金し、７月中に宿題と解体業者による自宅の整地などをできる限り終わらせる。

８月初旬には、両親の車と整地した実家があった土地を売る段取りがついた。

お盆の前日。

飯豊家のお宅に、大叔母の谷藤小百合さんがお迎えに来た。母方の祖父・千津夫の妹だと葬儀時に教えてもらっていて、会うのは２回目になる。

「久しぶりね。樹ちゃん。転弧君」

「お久しぶりです。小百合さん」

「元気そうで良かった。では、飯豊さん。樹ちゃん達をお預かりします」

「はい。行ってらっしゃい」

『行ってきます』

４日分の衣服を２人分詰めたキャリーケースを転がして、転弧と手を繋ぎ、出発しようとした矢先、小百合さんが向かい側の土地を指して尋ねてきた。

「ねェ、樹ちゃん。あそこだけ家が無いけど、どうしたの？」

「実家が建ってました」

「え？」

「……」
「僕の〝個性〟で壊れたの」
「！　そう…。ごめんね。辛いこと訊いて」
「つらくないよ。僕も樹姉ちゃんも、あんな家族嫌いだから」
『これ以上は詮索するな』という意味で黙ったが、まさか転弧が自分から説明するとは思わず、あたしはそうさせて心の傷が広がるんじゃないかと眉間に皺を作る。『あんな家族』と酷評した事で、不和を察した大叔母は、申し訳なさそうに話題を変えた。
「…今日ね。本当は車で来たかったんだけど、私もうおばあちゃんだし、免許証返しちゃって運転できないから、バスと電車を乗り継いで来たわ」
「どこから来たの？」
「横浜よ。住んでる場所からすぐの場所に、海があるのよ」
これから谷藤家に行き、明日は顔合わせの意味も含めて息子二人とその家族が集まると言う。
道中で家庭環境をかいつまんで話すと、彼女は突然寄り道を提案し、訳も解らずについて行くと、2ヵ月ぶりに訪れた駅の近くにある大型ショッピングモールに到着した。そこでようやく彼女の意図に気付き、転弧は初めてオールマイトのヒーローグッズをひとつだけ買ってもらい、あたしは特に憧れの人はいないが、弟の手前でそう振る舞う事

もできず、場所を取らない手の平に収まるベストジーニストの丸っこい人形を選んだ。
上機嫌の転弧と手を繋いで、今度は自分から谷藤家の家族構成を聞く。すると、年齢も併せて教えて下さり、前期高齢者の夫の雄之助さんと小百合さん。後期高齢者だが夫の両親と父と1歳違いの長男家族が母屋で同居しており、あたし達は迎えられた後の予行練習の意味も込めて、離れで過ごしてもらうと言われた。
理解を示した後、自分達を引き取ることになった経緯を大叔母に直接尋ねれば、彼女は戸惑う様子も変に隠す様子もなく、率直に答えられる。
「葬儀後に、遺骨の状態から遠縁の親戚が気味悪がってて ね。それを聞いて、私ってば無性に腹が立って、勢いのまま、夫と一緒に飯豊さんに『樹ちゃん達を引き取ります』って言ったの」
「そうですか…。……ありがとうございます。小百合さん」
「どういたしまして。さァ、駅に着いたわ。ここから歩くよ」
「はい」
彼らには言わなかったが、彼女達が事件や事故に巻きこまれた場合、順当にいけば、長男で従伯父の雪之丞さんの世話になる。しかし、それでも駄目な時は、熊本在住の長女夫妻と明日来る次男夫妻の家族にたらい回しにされるだろう。たらい回しと言えば、父の書斎にあった大量の本をブックオフで売った際、夏目友人帳を1冊１００円で見つけ

たが、引っ越しの荷物が増えるので諦めていた。小百合さん達に引き取られた後に、改めて古本屋を探してみよう。

そんな思案顔を体調が芳しくないと判断した彼女は、『駅の近くで昼食を食べようか』と提案し、転弧の要求でラーメンに決め、食後の運動がてら３０分ほど歩き続ける。

「ここが谷藤家。離れは、この奥ね」

「……」

「でっかいね。いつき姉ちゃん」

「うん…」

数時間前の会話の時点で豪邸だと想像はついたが、石畳と共にそびえ立つ立派な門構えの向こうに広がる日本家屋と日本庭園を前に、開いた口が塞がらない。今度は転弧に手を引かれ、大叔母の隣で母屋の玄関に立つ。

「お帰り、小百合。ああ。樹ちゃんと転弧君だね。はじめまして。小百合の夫で、雄之助（ゆうのすけ）です。よろしく」

「よろしくお願いします。今日からお世話になります。お邪魔します」

「お、お邪魔します…」

うがいと手洗いを済ませ、まず案内されたのは、母屋の居間にいる長男夫妻とはとこ達だった。

はとこ達とは年が近く、今年で９７歳と１００歳になる雄之助さんのご両親とも会い、谷藤家全員に歓迎される。夜は、みなとみらい大盆踊りに連れていって下さり、夏祭りの効果もあって、それなりに良好な関係を築けた。志村家の歪（いびつ）な環境と比べて、好きな事を堂々と言動にして否定しない理想の家庭に、これから徐々に慣れていこうと決意する。

こうして、初日の移動や緊張。夏祭りで疲れ果てて、その日は転弧のお願いにより、離れの２階で自室になった隅の部屋で布団を隣同士に並べて眠った。

お盆初日の翌朝。

小百合さんの次男・春之介さん夫妻が、子連れで大分県から到着したようだ。

はとこで同い年の翔之（しょうの）君が、彼から見ていとこで転弧と同い年の剛之（たかゆき）君連れて、母屋で食器洗いをしているあたしに尋ねてきた。

「樹ちゃん。昼飯食った後にさ、転弧君連れてってもいい？」

「どこに？」

「横浜市電保存館。２００年前の電車が保存されてる場所で、俺は何回も行った事あるし、はとこ同士もっと仲良くなりたいんだ。お願い…！」

両手を合わせて頼みこむ彼も弟と同じく鉄道好きで、あたしは留守番の間、彼らの妹

の百音ちゃんと桜ちゃんの世話をやる条件で引き受けたが、肝心の弟の意志が第一だと釘を刺す。両親が亡くなって以来、姉である自分にべったりと言っても過言ではない転弧にも、たまには男子同士の交流も悪くないだろうと思って知らせたところ、『昔の電車が見られる』と興奮する弟に水筒と財布を持参させて送り出した。

帰宅直後の興奮冷めやらぬ弟を母屋の洗面所にやってから、早口になる話を遮らずに聞き手に回って相槌を打ち、終わってから土産の袋を開封すると、中身は電車の絵が描かれたリングノートが1冊ある。何かとメモを取る癖がある自分には、とてもありがたい土産だ。

お盆2日目は、午前中からはとこ同士で横浜元町ショッピングストリートに行き、飯豊家や谷藤家へのお土産を和菓子店で選んだり、文房具屋や服屋を見に行く。その中で、転弧がランドセル販売店の前で足を止め、再来年購入するために好みを把握しておこうと、手を繋いでいる転弧の視線に合わせてしゃがんだ。

「ランドセル、見に行きたいの？」

「うん！」

「まだ早いんじゃね？　転弧君と剛之君は、来年年長さんだろ？」

「見るだけだよ。翔之君」

「百音も行きたい」

「わかった。一緒に行こうぜ。樹ちゃん」
様々な種類に目を輝かせ、幼いなりに悩んで選んだのは『つむもの』シリーズの『鎧・真朱』で、値段はほぼ８万円。
当然、手持ちが無いのでスマホでランドセルと外観の写真を撮って、夏祭り同様『欲しい物は自分のお金で買う』事を約束する。そして、夕食時に大叔母と従伯父達に話すと、『買い与える』と言って聞かなかったが、気持ちだけありがたく受け取る。
お盆３日目は、昨日に引き続き親達は休み、はとこ達だけで八景島シーパラダイスに行った。
翔之君は、先月１歳になったばかりの末の弟を。剛之君は、２歳の妹の面倒を引き受け、忙しい親達に束の間の休息を与える。初めての水族館にあたしと転弧ははしゃぎ、バーベキューに舌鼓を打ち、カワウソにはまった転弧に、ノートの礼にカラビナ付きマグカップを。これから、自分達の親代わりになる谷藤家にきんつばを土産に購入した。
お盆最終日は帰省ラッシュに乗じて、春之介さんご家族と玄関先で別れ、年末年始に会う事を約束した後に、徒歩で駅に向かう。
「どうだった？」
「小百合ばあちゃんのとこなら、毎日楽しいと思う」
「そっか…」

葬儀の日以降、転弧の髪は青白いままだが、徐々に元の優しさと年相応の反応を示す様子を観察していた。

恐らく、現場見分での記憶の荒療治と、葬儀場での感情の整理。ヒーローを否定しない飯豊家と谷藤家の家庭にお邪魔する事で、精神的に落ち着いたのだろう。今のところ、〝個性〟が発動する様子も、暴走する様子も見受けられない。

9月2日に、幼稚園や小学校でささやかなお別れ会を済ませたあたし達は、その週の土曜日に飯豊家から谷藤家に居を移し、改めて家族にご挨拶する。はとこ達と同じ幼稚園や小学校に転入する手続きは、大叔母のほうで済んでおり、今日は下見も兼ねて行き、幼稚園から小学校まで徒歩5分と近かった。

第４話　姉ちゃん

僕には、姉ちゃんが二人いる。

ううん。一人はいたし、一人は今生きてる。

でも、僕は、もう二度といたほうの姉ちゃんを、姉ちゃんと呼ばない。

お父さんのお母さん。僕からみて、もう一人のお婆ちゃんの写真で、嘘をついて僕のせいにしたから、昔みたいに華ちゃんと呼ぶことにしている。樹姉ちゃんは、その事に気づくと、悲しそうな顔をしても、僕に『ダメ』とは言わないで、『転弧が決めた事なら、それでいい』と認めてくれた。

「転弧。みんなに、さよならしよう」

「…さよなら」

今日は９月最後の土曜日で、小百合お婆ちゃんと樹姉ちゃんと一緒に、モンちゃん以外の家族だった骨を。粉になった骨を船の上から海にまく。僕達の他に何人か一緒に乗って、花びらとかお酒をばらまいていった。

他の家族は悲しそうだったけど、僕達は違う。

嫌な人が沈んでいなくなると思ったら、お葬式の時より心が軽くなっていく。

そして、僕の〝個性〟でバラバラになった家を片付けた夜の事を思い出していた。
（…転弧。父さん達の骨を持って船に乗るのと、乗らないの。どっちがいい？）
（…？　なんの話？）
（葬式の時、骨を海にまき方を従業員の人に聞いたんだ。明臣さんが調べたら、海にまいてくれる会社の人達が、あたし達の代わりに粉にした骨をまくか。それとも、あたし達の手でまくか。どっちか選べるらしくてね。大事な話だから、転弧にも選んで欲しいんだ）
（……。姉ちゃんは、どっちがいい？）
（…あたしは、会社の人に任せたい）
少し怒った声で姉ちゃんが言ったのは、僕達二人を守ってくれなかった大人が嫌いだから。
本当は、骨が入った小さなつぼにも自分から触りたくない事を知ってる。
（僕は……）
モンちゃんの骨をお葬式やさんが焼いた後、灰を入れてくれたペンダントを見て、樹姉ちゃんの言葉が頭に浮かぶ。
（船に乗る。僕が殺したんだから。最後まで、ちゃんとお世話する。せきにんってヤツでしょ？）

（っ！　…そうだね。…わかった。明臣さんに伝えてくるよ）

ワンワンが欲しいと、華ちゃんがまだひらがなを書けなかった僕の代わりに、サンタさんにお願いする手紙を書いてくれる。その時、樹姉ちゃんが『ワンワンが来たら、死ぬ最後の時までちゃんとお世話するんだよ。それが、命をかう責任だからね』と、お母さんがびっくりするほどおとなの考え方を言っていた。たしか、樹姉ちゃんは、犬をしつける本をサンタさんにお願いしていたような気がする。

粉になった骨をまいた場所をぐるりと1回回って、港に帰って、姉ちゃんの腕時計を見ると、お昼の1時過ぎになっていた。

「さて、二人共、お昼ご飯何にする？」

「トンカツがいい」

「樹ちゃんは？」

「転弧と同じです」

「わかったわ。今から探してみるね」

「大丈夫だよ、婆ちゃん。昨日、ちゃんと調べたもん」

「あら。じゃあ、私と樹ちゃんを案内してもらえる？」

「うん！　…あ。地図出すから、ちょっと待って」

父さん達が死んでから、姉ちゃんはずっと1人でお金とか住んでた家とか難しい話

を、飯豊さんや他の大人と話していた。だから、少しでも助けようと、飯豊さんの次男で、姉ちゃんより1歳年下の茂臣兄ちゃんに地図の見方を教えてもらう。電車が好きなのもあって、小百合婆ちゃんの家に引っ越すまで、だいたい読めるようになった。

オールマイトのリュックのジッパーを開けて、折り畳んだ地図を出してから、姉ちゃんの手を引いてステーションコアの地下1かいに行く。人気のお店で人がたくさん並んでたけど、どうしても食べたくてお腹がすいても我慢して、列に並んで待っている間に、姉ちゃんがサイトを開いてメニューを選ぶ時間をくれた。でも、お子さまプレートは、とんかつかカレーの2つしかなくて、小学生でお子さまプレートじゃないメニューを選べる姉ちゃんがうらやましい。

「……どうしたの？　そんなにむくれて」

「姉ちゃんだけずるい」

「え？　……あー。転弧も、小学生になったら選べるようになるよ。それまでは、お腹が小さいから、お子さまプレートで我慢してね」

「学校入ったら、お腹もおっきくなる？」

「うん。背が高くなって、食べる量が増えるからさ」

「約束！　忘れちゃ嫌だからね」

「約束するよ。あたしの可愛い弟だもの」

指切りしてから、来月の運動会の事を話すと、『応援に行くね』と約束してくれた。

次の日の日曜日。

朝起きてから一階におりて、顔を洗った後に台所に行くと、いつもそこにいるはずの姉ちゃんが見えない。

「…？　姉ちゃん？」

右に曲がって、台所とつながっている居間にあるソファーを見ても、いない。

「姉ちゃん、どこ？」

たった一人の家族がいない。

そう思ったら、かゆくなってきた。

はなれは僕達だけが住んでる家で、土曜日と日曜日だけは、おもやでご飯を食べないから、いつも姉ちゃんと二人でいる。だから、まだ起きてないのかと思って、もう一回二階に行って、姉ちゃんの部屋の前についた。

「…姉ちゃん？」

「……転弧？」

「入っていい？」

「…うん」

声に、力が無い。
きつそうで、どうにかしてあげたいと思うけど、どうすればいいか判(わか)んない。
それでも、ふすまをそーっと開けると、ふとんの中でぐったりしてる姉ちゃんがいた。
「おはよう、姉ちゃん…。大丈夫、じゃないよね？」
「そうだね…」
おでこを触るとあつくて、びっくりして、すぐに一階の冷凍庫からアイスノンとタオル。救急箱から体温計を持ってきて、おもやにいる小百合おばあちゃんを呼んできた。おばあちゃんもびっくりして、熱が出た理由を尋ねる。
「……たぶん、全部終わって気が緩んだんだと思う」
家族が死んで3ヵ月たって、やっと全部やるべき事が終わったから、体の力が抜けて熱が出た。『人の体は、そういうふうにできているんだよ』と、雄之助おじいちゃんが言って、姉ちゃんのために玉子のおかゆの作り方を教えてくれる。
おじいちゃんは口を出すだけで、作るのは僕だ。初めて作る料理は、順番がたくさんあって難しかったけど、猫舌の姉ちゃんが『おいしい』って言ってくれたから、嬉しくなる。
「おじいちゃん。僕に、おりょうり教えて！」
「おー、いいぞ。じゃあ、簡単なのからな」

「ありがとう」
「どういたしまして。それと、さっきの玉子粥、絵日記にして作り方を書いておくといい。転弧君が初めて作った料理だから、忘れないようにね」
「うん！」
あと、おばさんから熱がある時に食べやすいものが書いてある紙をもらって、はじめてのおつかいに出た。ただ、あんまりお店に行った事がないから、そこまでの道は、はとこの翔之君が一緒についてきて教えてくれる。さいふの中にあるおこづかいで、ゼリーとアイス。プリンを買って帰ってから、お昼ごはんに二人分の豆腐玉子あんかけを作って、おばあちゃんとせんたく物をせんたくきに入れたりして、姉ちゃんがしていた家のことを全部やった。
月曜日になっても姉ちゃんの熱は下がらなくて、その日は心配なまま幼稚園に行って、夕ごはんをおばさんと一緒に作る。れいぞうこを見ると、ゼリーとプリンがへって、ちゃんと食べることができてるなら良かったと安心できた。
いつき姉ちゃんの熱が下がって、学校に行けるようになって1しゅうかんがたったころ。
夕ごはんを食べたあと、あまったいちごあじのアイスを食べながら、姉ちゃんがぽつ

りとつぶやいた。
「…ぶばいがわらじんさん」
「…誰？　姉ちゃんのクラスメイト？」
「え？　いや、ちがうよ。新聞にのってた名前を読んだだけ」
姉ちゃんは、休みの日も新聞を読んでる。字を読むことが好きみたい。
おぼんから帰ってきた夜から、たまに小さな声でブツブツと何かを言う。悪の親玉を止めるとか、ヴィランを作らせないとか、むずかしいことをいっぱい。
「転弧」
「ん？　なに？」
「転弧の運動会が終わった後、姉ちゃんと二人で旅行に行こう」
「小百合ばあちゃんに内緒で？」
「ううん。そうしたら、おばあちゃん心配しちゃうでしょう？」
姉ちゃんがどこかに行くなら、僕も一緒に行きたい。
姉ちゃんがやることは、全部いいことだと思うから。
僕が行ってる幼稚園の運動会が終わって、次の土曜日に二人で旅行に行く。姉ちゃんにとって初めて行く場所なのに、悩まないで上大岡駅からのきっぷと駅弁を二人分買った。

「もう１人分買っていい？」
「なんで？」
「おみやげ」
「ぶばい…さんに？」
「うん」
　しゅうまい弁当と横浜チャーハン。鯛めし弁当とペットボトルに入ったお茶を３本選んでかごに入れて、それで終わりだと思ったら、横浜の焼いたお菓子を別々の店で１箱ずつ買って、電車に乗る。
　１時間３０分くらいのところにある駅で降りて、しばらく歩いて、橋みたいに川の向こうに行ける道路の下を見ては、また違う場所に行ってを繰り返す。
　１２時が過ぎてから、姉ちゃんが『あ…』と僕にだけ聞こえるような声で、遠くを見ていた。
　道路の下。
　かげになってて見えにくかったけど、そこには、金色のかみの男の人がいる。
「……？　姉ちゃん？」
　姉ちゃんが弁当を持ってるふくろを落としそうになって、あわてて持つところをつかんだ。それから見上げると、遠くを見たまま、ボーッとしてる。

なにかへんだ。
「…姉ちゃん？　…いつき姉ちゃん？　どうしたの？」
「っ…。……いたい」
よく見たら、まゆをよせてシワを作っていた。
「どこが？」
「あたま……」
どうしたらいいかわかんなくて、姉ちゃんの服をつかんでると、うしろから男の人の声がした。
「どうした？　姉ちゃん、具合悪いのか？」
「う、うん…。急に痛いって言ってね」
「じんさん……」
「は？」
『じんさん』と呼んだ人のジャケットのそでをつかんで、いつき姉ちゃんはシワを作ったまま、言葉をはく。
「ぶばいがわらじんさん、ですか…？　しょるいそうけんになった、１６さい」
いつき姉ちゃんが何を言ってるのか、わからない。
はじめて会う人なのに、。

「あんた…、いったい誰だ？　初めて会うよな？　一発で名前も状況も当てるって、直感が鋭いのか？」
「いえ。先週、新聞で読んだので。仕事を失うって怖いですよね」
「ああ。そうだな……」
　じんさんが、姉ちゃんと視線を合わせるために、アスファルトの道にひざをついてすわりこむ。
　僕は、なんだかわからなくて、ずっと姉ちゃんの服をつかんでいた。姉ちゃんは、ちゃんと見つけられたことからへらりとわらってたけど、また痛いと言ったから、『じんさん』は影になってるところで休むよう、僕と姉ちゃんに言った。
「今、頭痛いんだろ？　ゆっくり休んでいけ」
「はい…。…ありがとうございます。…行こう。転弧」
「う、うん…」
　地面にすわってお茶を飲んだあと、姉ちゃんはリュックをまくらにして寝る前に、うとうとしながらじんさんと話す。
「あんた、名前は？」
「…志村樹、１１歳。いつきは、樹木の樹って書きます。この子は、あたしの弟です」
「へェ…」

「ぼ、僕、志村転弧。５歳！」
「俺、分倍河原仁。１６歳。苗字が長いから、仁でいい。よろしく」
「よろしくお願いします。えっと…」
「仁君でも、仁兄ちゃんでも、呼び方はなんでもいい。勘が良いのは、〝個性〟か？」
「わかりません。でも、昔から両親とか友達に、勘が良いって言われてて……。もし、〝個性〟だとしたら、あなたに会う前から発現してると思います。先生が『あと一個持ってる』って仰ったから……」
　頑張って起きようとまばたきしてたけど、力がぬけたようにまぶたを閉じてねむった。息をすったりはいたりしてる音がするから、大丈夫だと思う。
「複数〝個性〟持ちか…。テンコ君知ってた？」
「ふくすうって何？」
「ふたつより多いって意味だ」
「じゃあ、姉ちゃんは、〝個性〟みっつ持ってるね」
「３つも？」
「うん。ふゆうと、ねんどうりょくと、今のやつ」
「マジか…」
「…あ、３つで思い出した。これ、ぜんぶおみやげ。仁兄ちゃんにって、姉ちゃんが選ん

だの」
　弁当とお茶。横浜のお菓子が入ってる袋を渡すと、口を開けてぽかんとされた。何か間違ったかな、と困っていると、僕と袋をかわりばんこに見て、
「いいのか…？」
　と聞いてくる。
「おみやげだから、どうぞ」
「……ありがとう」
　お茶と横浜チャーハンのフタを開けて、仁兄ちゃんは泣きながらお昼ごはんを食べていく。
　僕のリュックに入ってたポケットティッシュとプラスチックのごみ袋を渡して、食べ終わるまで待ってから泣いてた理由を聞いた。
「人をバイクではねて、仕事と家をいっぺんになくしてな……。ためたお金はへっていくばかりで、生きるためにはお金がいる。だけど、知り合いも親もいねェし、どこが俺をやとってくれるかわかんねェんだよ」
「…姉ちゃんとなら、なんとかしてくれるかも」
「いつきちゃんには…。いや、お爺さんにも迷惑かけらんねェよ。他人だし」
「たにんでも、仁兄ちゃんの事も心配してたもん。お手紙も書いてたんだよ」

「手紙…？」

弁当の袋に手紙が入ってても、今は開けない。それを持ったまま困ってるから、僕は姉ちゃんが起きるまで話を続けようと口を開く。

「…僕、仁兄ちゃんとお友達になりたい。…だめ？」

「……駄目じゃねェよ。ありがとな」

仁兄ちゃんは口だけ笑って、僕の頭を優しくなでてくれた。それから、僕も家族がいない事とか犬がいた事を話したりして、今の姉ちゃんを知ってもらえるようにする。

ごご2時に姉ちゃんが起きたから、仁兄ちゃんが具合を聞いた。寝たら頭が痛くなくなって、あくびとのびをした後に、たてに長いふうとうを別に渡す。中に入ってるのが何か、なんて、兄ちゃんも姉ちゃんも言わなかった。

仁兄ちゃんと一緒にお菓子を食べてから、帰る時間になってバイバイと手を振って、お別れをした。

第５話　寄り添う心

　手紙に添えられた地図を頼りに、神奈川県横浜市にある一軒家に行くと、眼前に、立派な門構えの日本家屋が建っていた。
　景観を守るためだろうか。
　呼び鈴は無く、緊張しながら戸を叩くと、しばらくして一人の男性が応対に出てきた。
「どちら様ですか？」
「あ、分倍河原です。先週、志村樹ちゃんに手紙をもらいまして。転弧君ともお会いしました」
「ああ。あなたが…。雪之丞です。どうぞ上がって下さい。話は二人から聞いてます」
「え…。…えっと。…お邪魔します」
　庭も日本庭園を象徴する松や楓があって、玄関を潜るとこちらも和で統一されており、呆気にとられつつ、玄関を上がって洋室に通される。その間に、子供達の声が聞こえてきて、団欒を邪魔したんじゃないかと思った。だが、特に気にされる様子はなく、革製の椅子に座るよう勧められ、一言断りを入れて座る。
「…それで、分倍河原さんは、これからどうしたいんですか？」

「できれば働きたいです」
「そうですか。…中卒じゃ厳しいけど、良ければ、ひとつ提案してもいいですか？」
「え…？　はい」
「私が分倍河原さんの保護者になって、横浜に引っ越して、働きながら高校に通うという方法がありますが、いかがでしょう？」
「……は？」
誰が、俺の保護者になるって？
聞こえはした。意味も解った。
でも、驚きと突然の事ですぐに信じられなくて、思わず聞き返してしまった。それでも害する事はなく、もう一度言って下さる。
「私が保護者になりますよ」
「それは理解できますが、初対面の人にですか？」
「困った時は助け合うものでしょう？　これも何かの縁ですからね」
「…ありがとうございます」
「どういたしまして」
樹ちゃんと転弧君が繋げてくれた縁で、俺は後ろ盾を得たらしい。二人には一生頭が上がらないな。

一段落した時、扉をコンコンと叩く音がして、彼が入室の許可を出し、女性が、茶菓子と緑茶が注がれた湯呑みを丸盆に載せてやって来た。
「ありがとう。琴音」
「どうぞごゆっくり」
女性が出て行ってから連絡先を交換し、名刺を頂いてから野宿している場所を地図に書き起こし、この家の住所を教えてもらい、恩人の二人の事について話していくと、どうやら隣接する離れに住んでいるらしい。
「樹ちゃんと転弧君に会っていきます？」
「え。いいんですか？」
「いいですよ。分倍河原さんの恩人ですから」
茶菓子を完食し、緑茶を完飲してから、応接間となる洋室を出て玄関で靴を履き、これまた立派な離れに足を向ける。雪之丞さんが玄関を叩くと、しばらくして樹ちゃんが応対に出て、俺の顔を見て笑顔になり、居間にいる転弧君を呼んだ。
「雪おじさん。１０時半になったら、仁君連れて、お爺ちゃんとネットカフェに行ってきます」
「行ってらっしゃい。じゃあ、僕はこれで失礼するよ」
「ありがとうございます。雪之丞さん」

一礼して彼と別れ、離れの居間へ幼い二人に招かれて上がり、居間で緑茶とおかきを振る舞われる。

そして、先月、大叔母に引き取られたとは思えないほど、二人共性格が明るく、こちらも肩の力が抜けた。しかし、樹ちゃんは行儀の良さが抜けず、まだ俺と敬語で話している。転弧君のようにタメ口で話すには時間がかかりそうだが、しばらくはこのままでいこう。

「どうでしたか？　雪おじさんは」

「良い人だよ。保護者になってもらえるみたいだから、これから引っ越しの準備をするよ」

「どこに引っ越すの？」

「横浜のどこかかな」

そう言いつつ、横浜に土地勘が無いから、まずは谷藤家が住む磯子区にしようと決め、そこからアパートと夜間学校に通うつもりでいる。

「仁兄ちゃんの〝個性〟ってある？」

「あるよ。２倍で、物とか人を増やせるんだ」

「僕も増やせる？」

「うーん。やった事ないけど、巻き尺があればたぶんできると思う」

転弧君が目を輝かせ、樹ちゃんが意気揚々と居間から出る直前に、ちゃんと注意点を話す。

「あ。俺の〝個性〟を解除するには、増やした〝個性〟に骨折くらいのダメージがなきゃいけないし、その後は泥になるから、家が汚れちまう」

「使わなきゃ衰えますよ。〝個性〟は、身体機能の延長ですから。…あ。これ、仁君にあげます。これから、何かと必要になってくるでしょう？　ノートと、ボールペンと修正テープと、筆箱」

「何から何まで、本当にありがとうな」

プレゼントの袋を受け取って、〝個性〟の話で先週の事を思い出し、この流れで尋ねてみた。

「先週の樹ちゃんのあれ、〝個性〟だったの？」

「はい。接触感応（サイコメトリー）でした。頭痛は、暴走した時に情報を上手く処理できなかったから、らしいです。週末と長期休暇の時に施設に通って、来年、転弧と一緒に滋賀県に引っ越します」

「施設？」

「彦根市の山沿いにある異能力支援施設の一つで、二人共強い〝個性〟だから、日常的に使って感覚を覚えなきゃいけないって、病院の先生に言われました。水曜日に見学に行

きましたけど、研究所も兼ねてる大きな施設で良かったです」
良かったとは言っても、先月引っ越したばかりじゃないか。
そう言いたいが、二人はすでに納得して意気込みもあり、水を差すのも良くないと黙って茶を飲む。
「そこで訓練したら、最短でヒーローになる夢に近づける。それなら早いほうが良いって、転弧と話し合ったんです」
「僕達、二人でヒーローになるんだよ」
夢があって眩しいと思う反面、自分も恩返しするために働きながら。夜間学校に通いながら、見つけられるだろうかと考えこんで茶菓子を食べ終わる頃には、１０時３５分になっていた。
５分遅れで玄関に向かうと、すでにお爺さんが母屋の外で待っていた。謝罪する俺達に対し、笑って許して下さった。
「大丈夫。５分なんて誤差だよ。はじめまして。二人の大叔父の、雄之助です」
「分倍河原仁です。はじめまして。二人にはお世話になっております」
「そっか。役に立ったようで良かったです。じゃあ、行きましょうか」
「はい」
谷藤家から徒歩で快活クラブ磯子駅前店の２階に向かい、受付で入会し、３時間パッ

クを選び、合算した料金を支払う。シニア割引の谷藤家と別れて部屋に移動し、荷物を置いてから、パソコンと向き合う椅子に座った。

樹ちゃんから贈られたばかりの袋を開け、必要な事を書き出す準備を整えた。

自分の貯蓄は、銀行や郵便局に預けてある以外で、財布の中にある手持ちの４０００円強だけ。

ホームズで、磯子駅から徒歩２０分。敷金と礼金が無いアパートを複数選ぶついでに入居可能な時期も調べる。他のサイトで、不動産を訪ねるのは平日が良いとあり、それは明日にして、仲介している不動産の名前と住所。行き方を検索する。

夜間学校は、磯子区の工業高校が定時制をやってて、そこで工業技術も学べるらしく、自分の〝個性〟の手助けになればと選択した。来年入学するとして、願書提出や入試まであと3ヵ月になっており、勉強も含めるともう時間が無い。帰りに参考書を買おうと決意する。

そして、雪之丞さんの会社は中卒を募集しているものの、俺は普通免許を持っておらず、彼が『働きながら夜間学校に通ったほうがいい』と言った意味を理解した。タウンワークでバイトを探して、複数の候補を書き連ねていき、神奈川県の地方銀行も探して、最も店舗数が多い横浜銀行の新規口座開設も考えておいた。

「こんなもんか…」

一段落ついてスマホの時刻を見ると、利用してから３０分が経過し、腹がすいてきたのと、久しぶりに漫画でも読もうと思って部屋を出る。漫画を選んで読んでいるうちに１２時を少し過ぎた事に気付き、ドリンクついでに昼食を選んだ。ポテトサラダが付いたヒレカツと焼売ランチを食べた後は、一人のんびり２時間過ごしていく。

「仁兄ちゃん。どうだった？」

「久しぶりにのんびりできたよ」

「良かったね」

「仁君。いつでも遊びに来て下さい」

「ああ」

「ここに来る前、雪之丞と話してたんだけどね。いつ分倍河原君を迎えに行こうか？荷物あるでしょう？」

「え。大丈夫ですよ。引っ越すまで野宿してます」

「いや、そういうわけにもいかないよ。弱い立場の者を狙うチンピラや敵（ヴィラン）もいるんだから。遠慮せずに、ウチに来たらいい」

「うーん……。じゃあ、１０月３１日にお願いします」

「わかった。息子に伝えておくよ。これ、僕の連絡先」

「ありがとうございます」

「いつ不動産に行くか決めた？」
「はい。明日行こうかと」
「そっか。説明の時に保護者がいるかな？　平日となると、雪の仕事帰りになるけど大丈夫？」
「大丈夫です。こちらは構いません」
「わかった。その帰りに、君を送るよ。夜道は危ないから」
念を押され、一理ある事もあってご厚意を受け入れ、雪之丞さんの仕事帰りに合わせて不動産に行く事に決めた。

厚意を受け入れてから１週間の間に、俺は荷物の整理と、引っ越しに必要な手続き。住居の確保に奔走し、無事に１０月３１日を迎える事ができた。
「おはよう。分倍河原君」
「おはようございます。雪之丞さん」
荷物を雪之丞さんの車に積み込み、助手席に乗り、一路横浜を目指す。
「１週間お世話になります」
「こちらこそ、よろしく。二人が喜ぶ」
来月中旬に引っ越しをするまで、俺は谷藤家の離れ。つまり、幼い二人と同じ屋根の

下で暮らし、転弧君と合部屋で過ごす事になった。